



筑紫女学園大学リポジト

Emotional expressions in self-conscious situations in middle childhood

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 理香, MORITA, Rika メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/265

児童の自己意識場面における情動表出

森 田 理 香

Emotional expressions in self-conscious situations in middle childhood

Rika MORITA

問題と目的

人は発達とともに社会化してゆくが、社会で適応的に振舞うために必要となる能力の基盤となるのが自己及び他者理解である。社会的な文脈において状況に応じた振る舞いをするためには、今おかれている状況の認知のみならず、他者の心的状態、そして、自己の行動がいかなる影響を及ぼすかといった自己意識が必要である。また、自己と他者との関係を紡ぎ、あるいは壊す役割として機能しているもののひとつとして情動があげられる。情動の機能を重視する立場では、情動は本質的に関係的 (relational) なものであるとされ、他者との関係を確立したり、維持したり、崩壊させる機能を持つと論じている (Campos, Campos&Barrett, 1989)。嬉しさ、喜び、共感といった情動は関係を促進、維持する機能を持つものに対し、怒り、嫌悪といった情動は関係を崩壊させると同時に相手から自己を遠ざけるという点において自己を守る役割を担っているといえる。

M. Lewis (1993) は情動を発達初期にみられる基本的情動 (primary emotion) と自己意識の発達と同時期にみられる自己意識的情動 (self-conscious emotion) の2種類に分類した。すなわち、発達初期に見られる喜び (joy) や悲しみ (sad)、興味・関心 (interest)、怒り (anger)、嫌悪 (disgust) などに代表される情動を基本的情動とし、1歳半頃に見られる自己意識の獲得と同時期にみられる困惑・照れ (embarrassment)、はにかみ (shyness)、恥 (shame)、罪悪感 (guilt)、誇り (pride) などの情動を自己意識的情動 (self-conscious emotion) とした。基本的情動の生起には自己意識を必要としないのに対し、自己意識的情動は自己意識の関与がなければ生起し得ないとしている。そして、ここでいう自己意識にはいくつかの段階が設けられている。自己鏡像認知と自己評価の段階である。鏡に映った自分を自己と認知すること (自己鏡像認知) は対象化された自己を視覚的に認知できたことを意味し、自己意識の明らかな指標とされる (板倉, 1999)。自己鏡像認知は一歳半頃に確立されるといわれており、それに伴う形で照れ・当惑が見られ始める。その後、自己理解、他者理解の発達とともにある種の基準や社会意的ルールなどを内在化し、その基準に沿った自己評価が出現する。それと同時に、恥、誇り、罪悪感が見られるようになるとされている。

Barrette (1995) はこれらの自己意識的情動を社会的情動 (social-emotion) と呼んだ。困惑・照れ、はにかみ、恥、罪悪感、誇りなどは、他者との関係と緊密に関与し、対人的機能を有するとい

うことを強調したのである。例えば、照れ、困惑などの情動は新奇な他者を目前にした状況で生じ、身体的変化として筋肉の収縮、体温の上昇という形で現れる。これらの反応は行動を抑制するものであり、危険から身を守る役割を有しているといえる。恥は、それを主観的に経験している個人に対し、他者の評価に晒される事から回避するような行動（他者とのアイコンタクトや接触を避ける、顔を隠す、など）を動機付けるといえる。こうした行動は、他者に対する敬意や服従、あるいは表出者本人が他者に比して小さく、価値のない存在であることを伝達し、結果的に表出者に対する他者の反応をも制御するという（Barrette, 1995）。罪悪感、恥は、それを感じる個人を、失敗を修復したり、それを他者に告白するなどの行動に駆り立てるといえる。また、こうした行動は表出者が他者に対して自分がその基準を理解した、あるいは理解している状態、またそれ以後もそれを犯さないという意思を伝達するという（Barrette, 1995）。これらの情動は社会的存在である自己を維持していかなければならない人間の本性を垣間見せるものである（久崎, 2003）。

このように情動を語る際に社会的な関係性を取り入れることが重要視されるという流れを汲み、情動研究において関係性を取り入れて検討する試みが近年増えてきている。関係性と情動表出に関して検討した研究としては、埜（1999）の児童期中期に焦点を当てたものがある。この研究においては、相手との関係性によって情動の表出が変化し、さらに、怒り、悲しみ、喜びなどの情動ごとに関係性と情動表出の関連が異なる変化をみせるという結果がみられた。ここから、児童においても相手によって情動を使い分けているといえる。他方、久崎（2004）による幼児を対象とした研究においては、子どもの照れ・共感、母親の他児との関わり方のスタイルが影響しているという結果であった。すなわち、発達初期における子どもの共感傾向は、親の行動のモデル学習によって促されることが示唆された。これらの研究からは、情動表出への社会的環境の影響は発達の早い時期から始まっていることが示唆される。しかし、これらの研究は質問紙による調査であるため、子どもの実際の表出行動を捉えているとはいえない。このような場面ではどのように振舞うかといった認知的側面が含まれている可能性があり、そこで、実際の表出を捉えることが必要といえる。

他方、情動と同期的に発達する自己意識に関する研究から、自己意識に関しては児童期中期にひとつの転機を迎えることが分かる。佐久間・遠藤・無藤（2000）による児童を対象とした自己理解・自己評価について研究において、幼児は自己の単一側面、特に肯定的側面のみを認めがちであるが、加齢とともに自己の否定的側面を含めて自己を複雑化して捉える傾向にあった。情動発達においても同様の傾向がみられ、小学校の高学年になると自己の多面性を知り、捉え方が複雑化すると同時に情動も複雑化するといえる。

これまで述べてきたように、自己意識（社会的文脈における自己のおかれた状況の認知も含む）、と社会的情動は密接な関係にあり、同期的に絡み合いながら発達する過程が想定されている。しかし、それらの関係について実証的に検討された研究はほとんどない。そこで、本研究の目的は自己意識と社会的情動表出の関連性に関して検討することとする。

自己意識という現象について考えると、自分で自分の姿をみて（物理的な自己ではなく内的な表象的自己も含む）自己を意識化するという過程と他者に自分を見られることによって自己が意識化

するという過程が考えられる。前者の自己内の基準によってのみ自己を意識化する方法を用いると、自己志向的な欲求や情動（自己顕示欲、快感情など）が優先されると考えられるが、後者の他者視点が加わることによって照れや恥ずかしさ、否定的感情等より複雑な感情が生起することが予測される。本研究においては、自分自身が露呈された時に引き起こる情動に注目し、その表出のあり方と情動表出に対する社会的文脈の影響について検討したい。具体的には、発達の転機の時期であり、さらには自己の情動について言語化できる高学年の児童を対象とし、児童が社会的文脈において自己が焦点化（自己像の提示）されたときにいかなる情動状態を経験するのか、自己を視覚的にフィードバックした際の情動状態に関する詳細な検討を行う。

本研究の目的をまとめると以下ようになる。

- ① 児童における自己観察と情動の表出の関連性
- ② 情動表出に対する社会的文脈が与える影響についての検討。

方 法

- ① 対象児：定型発達児はF市内の公立小学校に在籍する5年生25名（男子14名 女子11名）の児童を対象とした。実験者は事前に授業に参加したり、休み時間を共に過ごしたりして生徒とのラ・ポールをとった。実験の協力についてはクラス担任から内容について話し、協力を依頼した。
- ② 実験時間、場所：校内の一室を利用し、昼休み、あるいは放課後の時間を利用して行われた。
- ③ 刺激映像：自己・他者が同時映像でパソコン画面から提示された。映像は正面に設置されたビデオカメラで撮影され、14インチのパソコンモニターから同時に（リアルタイムで）提示された。
- ④ 実験計画：自己・個別条件（以下、個別条件）、自己・社会条件（以下、社会条件）、自己・関与条件（以下、関与条件）、他者条件の全4条件で実験を行った（Table1）。性と条件の2要因計画である。群（2：男、女）×条件（4：個別、社会、関与、他者）。個別条件では、教示を行った後に映像を提示し、実験者は速やかに部屋を退室した。児童には一人でパソコン画面から提示される映像（自己映像）をみてもらい、その表情は正面にあるビデオカメラから撮影された。以下全ての条件において表情は正面のビデオカメラから撮影された。社会条件においては、他者（筆者）と共に映像（自己）をみるが、このとき他者（筆者）は何も働きかけを行わなかった。他者がいるという点においては社会的文脈といえるが、他者からの直接的な刺激はない条件である。関与条件では、社会条件と同様に対象者と他者（実験者）の二者場面であるが、他者からの働きかけを行った（「○○さんが写っていますね。」「今、手をあげましたね。」等の状況をナレーションする声かけを行った）。社会条件と比較すると、直接の社会的刺激は強いことが予測された。他者条件では、対象者と他者（実験者）とともに他者（実験者）の映像をみた。これは自己が提示されない、他者が焦点づけられた場面であるため、社会的情動が生起されにくいと予測された。刺激映像は1条件につき、約40～50秒間提示を行った。詳しい教示は以下に示すとおりである。

Table 1 各条件における刺激、同席者、他者の関与

条 件	呈示刺激	場面の同席者	他者の関与
自己・個別条件（以下、個別条件）	自 己	な し	な し
自己・社会条件（以下、社会条件）	自 己	実験者	な し
自己・社会関与条件（以下、関与条件）	自 己	実験者	あ り
他者条件	他 者	実験者	な し

<教 示>

1. 「今から、あなた（私）がこの画面に登場します。しばらくこの画面を見ておいて下さい。」
2. テレビの電源をいれ、対象者（実験者）の顔が画面に登場した。
3. 個別条件の場合、実験者は速やかに部屋を退室した。他の3条件の場合は刺激映像を2人で視聴した。
4. 刺激映像を40～50秒提示し、その間の表情はビデオカメラで撮影された。
5. 映像提示後、画面を消して対象者の気持ちに関する質問を行った。気持ちは、「うれしい」、「いや」、「おもしろい」、「はずかしい」、「怒り」、「かなしい」の6種類で、B5の大きさのカードを用いてそれぞれの気持ちについて4段階（まったく感じなかった、あまり感じなかった、少し感じた、すごく感じた）で質問した。言葉を用いて口頭で答える者と指で指し示す者がいたが、言葉を用いずに指で指し示した場合も意思を表明したものと受け取りカウントした。

情動の表出に関するVTR分析

自己・他者映像を観察していた時の情動の表情表出についてVTRを用いた情動の印象評定を2名で行った。この2名は心理学を専攻する大学院生である。分析の対象としたのは、実験で映像を視聴しているときの表情が撮影されているVTRである。各条件につき約50秒間撮影されているビデオテープの最初と最後を削除した約30秒を分析の対象とした。30秒間のVTRを3秒ずつの10コマに区切り、3秒間の間に表出された情動を評定した。表出された情動を「ポジティブ」、「ネガティブ」、「Embarrassment」（はにかみ、照れ、以下照れと標記）、「Shyness」（恥、気まずさ、決まり悪さ）、「ニュートラル」の5カテゴリーに分類した。「ポジティブ」には喜び、興味・関心が含まれ、「ネガティブ」には恐れ、悲しみ、嫌悪、怒り、「Embarrassment」は照れ、はにかみ、「Shyness」は恥、気まずさ、「ニュートラル」は情動の表出がみられない無表情がそれぞれ含まれる（Table2）。「Embarrassment」と「Shyness」は社会的情動という点に関しては同類であるが、質的に異なる情動であるので別々に評定した。情動の評定に関しては、印象評定であるために評定者の印象によってカテゴリーに分類するという手続きを用いたが、いくつかの下位カテゴリーに評定のばらつきがあるため、一定の基準を設定した（Table3）。3秒の間に情動が表出された場合は1ポイント、2つの情動が同時にあらわれた場合は0.5ポイントずつ与えた。情動が表出されなかった場合は、ニュートラルに分類された。また同時に、情動の強さを1～4に得点化した。

尚，対象男児1名分のビデオの映りが悪かったため，以下の分析から外した。

Table 2 情動のカテゴリー

カテゴリー	下位カテゴリー
Positive	喜び 興味・関心
Negative	恐れ 悲しみ 嫌悪 怒り
Embarrassment	照れ・はにかみ
Shame	恥・気まずさ
その他	驚き など
ニュートラル	無表情

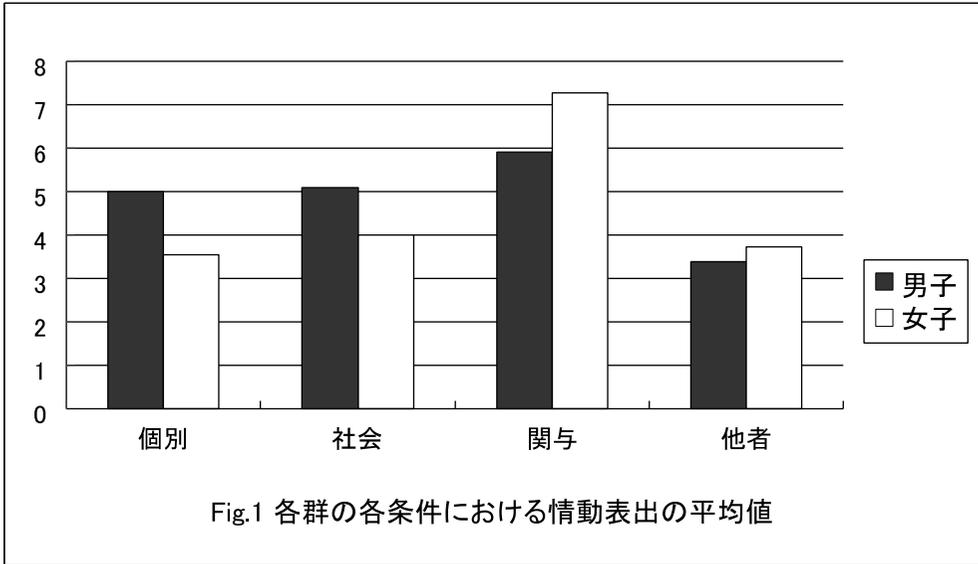
Table 3 下位カテゴリーの内容

カテゴリー	下位カテゴリー	内 容
Negative	嫌悪	不愉快な対象や観念に取り付かれたり，近すぎる
Embarrassment	照れ・はにかみ	身なりを整える。きよろきよろする。微笑する。視線をわずかにそらす（視線をそらしても，戻す，笑う）。
Shame	恥・気まずさ	眉をひそめる。視線を泳がせたり，そらす。顔をそむける。頭をたれる。うなだれる。身を縮める。
無表情		情動が生起していない状態

結 果

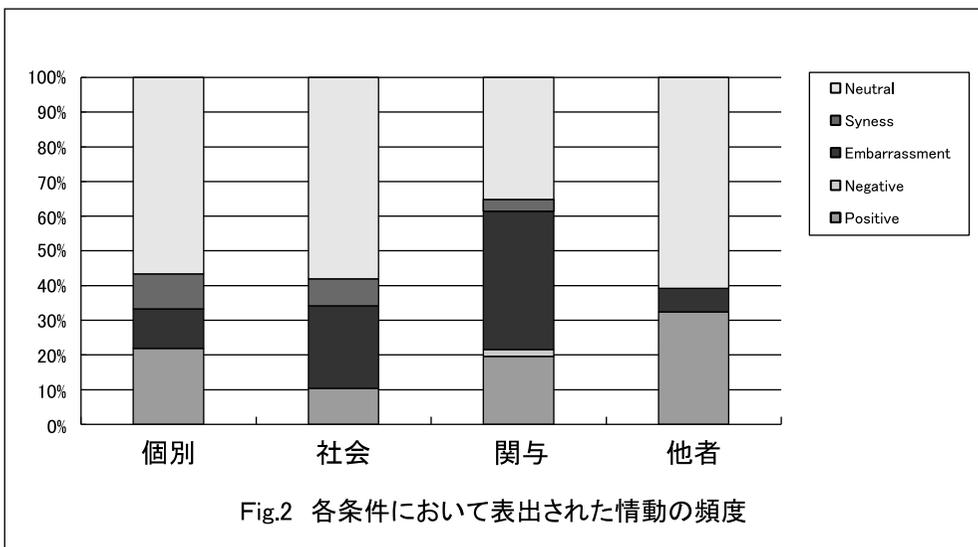
1. 各条件における情動表出の男女間の比較

情動表出の合計値（ポジティブ，ネガティブ，シャイネスの表出頻度を合計した値）について群（2：男子，女子）×条件（4：個別，社会，関与，他者）の2要因分散分析を行ったところ，条件の主効果 ($F(1, 22)=12.666, p<.001$)，群と条件の交互作用 ($F(3, 66)=4.275, p<.05$) がそれぞれ有意であった。Tukey法による多重比較を行ったところ，関与条件においては，個別条件 ($p<.001$) および社会条件 ($p<.001$)，他者条件 ($p<.001$) よりも情動の表出が多かった。また，女子において，個別条件 ($p<.001$)，社会条件 ($p<.001$)，他者条件 ($p<.01$) においてよりも，関与条件において情動の表出が多かった (Fig. 1)。直接的な社会的な刺激の多い関与条件で最も情動の表出が多くみられたといえる。



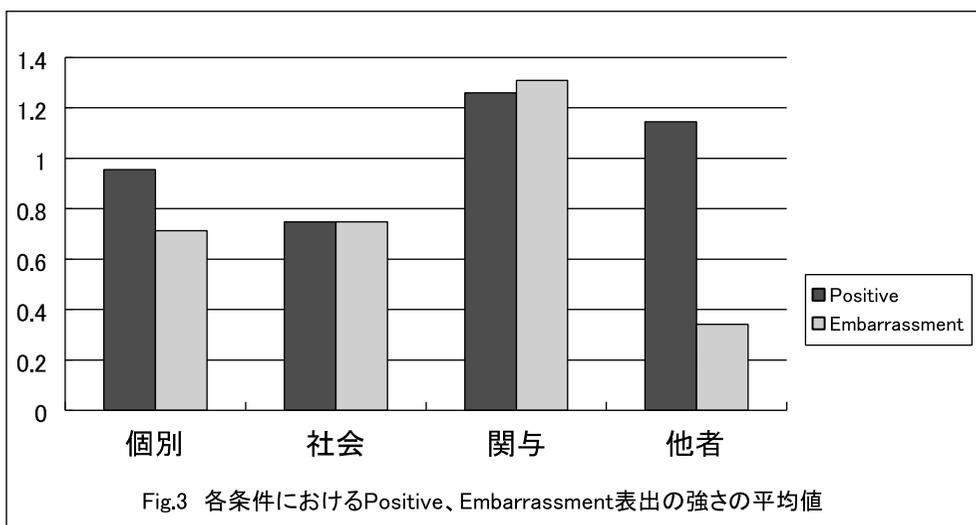
2. 各条件における各情動表出の量的検討

各情動の群，条件による表出量の差異について検討するために，各条件における表出の頻度の合計値について対数線形モデルの当てはめによる分析を行った。その結果，「照れ」の表出は男子よりも女子に多くみられ ($p < .01$)，「Shyness」，「ニュートラル」は男子に多くみられた ($p < .01$ ， $p < .05$)。「照れ」は個別条件よりも関与条件に多く表出され ($p < .01$)，さらに他者条件よりも関与条件に多く表出された ($p < .01$)。「Shyness」は他者条件においてよりも個別条件において多く表出され ($p < .01$)，さらに他者条件においてよりも社会条件において有意に多く表出された ($p < .01$) (Fig. 2)。



3. 各条件における情動表出の強さに関する比較

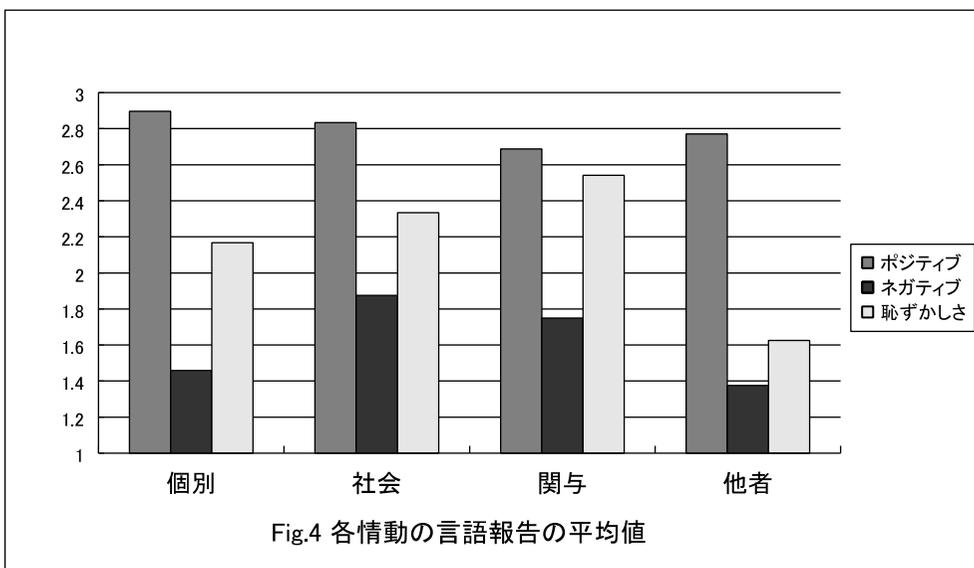
各情動表出の条件による表出の差異について検討するために、従属変数を各情動表出の強さの平均値として、群(2)×条件(4)の分散分析(従属変数は各情動の強さの平均値)を行った。「ネガティブ」「ニュートラル」に関して有意差はみられなかった。「ポジティブ」($F(1, 22)=4.279, p<.05$)、「照れ」($F(1, 22)=15.869, p<.001$)において条件の主効果がみられた。Tukey法による多重比較を行ったところ、「ポジティブ」は社会条件、関与条件においてよりも他者条件において有意に強く表出され($p<.05$)、また、社会条件において他者条件、関与条件よりも有意に弱く表出された($p<.05$) (Fig. 3)。「照れ」は関与条件において最も強く表出され($p<.05$)、個別条件よりも社会条件において($p<.05$)、他者条件よりも個別条件において($p<.05$)、他者条件よりも社会条件において($p<.05$)それぞれ有意に強く表出された(他者<個別<社会<関与の順で有意に強く表出された) (Fig. 3)。



4. 各条件における各情動の言語報告の比較

映像視聴後、対象者の情動に関してそれぞれ4件法で質問を行った。「うれしい」、「おもしろい」の得点の平均値を「ポジティブ」とし、「いや」、「怒り」、「かなしい」の得点の平均値を「ネガティブ」、さらに「はずかしい」についての得点はそのままとし、情動を「ポジティブ」「ネガティブ」「恥ずかしさ」の3種類とした。各条件における情動の言語報告の平均値を比較した。条件(4)×情動(3)の2要因の分散分析を行ったところ、条件の主効果($F(3, 69)=4.592, p<.05$)、情動の主効果($F(2, 46)=23.129, p<.001$)、群と条件の交互作用($F(6, 138)=3.426, p<.05$)がそれぞれ有意であった。Tukey法による多重比較を行ったところ、条件に関しては他者条件よりも社会条件において($p<.05$)、他者条件よりも関与条件において($p<.05$)、自己情動を高く評価していた。自分がビデオに登場していて、他者が同時に自己の映像を視聴する場面では情動が生起しやすいとい

える。情動の種類においては、「ネガティブ」よりも「恥ずかしさ」、「ポジティブ」を多く感じていると評価しており ($p < .05$)、さらに「ネガティブ」、「恥ずかしさ」よりも「ポジティブ」を多く感じていると評価していた ($p < .05$)。交互作用に関する多重比較によると、「恥ずかしさ」は他者条件よりも個別条件 ($p < .05$)、他者条件よりも社会条件 ($p < .05$)、他者条件よりも関与条件 ($p < .05$) において有意に高く評価しており、「ネガティブ」は個別条件よりも社会条件 ($p < .05$)、個別条件よりも関与条件 ($p < .05$)、他者条件よりも社会条件個別条件よりも社会条件 ($p < .05$) において高く評価していた。また、個別条件において「ネガティブ」よりも「恥ずかしさ」 ($p < .01$)、「恥ずかしさ」よりも「ポジティブ」を高く評価しており ($p < .01$)、社会条件においては「ネガティブ」よりも「ポジティブ」 ($p < .01$)、「恥ずかしさ」よりも「ポジティブ」 ($p < .05$) を高く評価していた。さらに、関与条件においては、「ネガティブ」よりも「ポジティブ」 ($p < .01$)、「恥ずかしさ」よりも「ポジティブ」 ($p < .01$) を高く評価しており、他者条件においては「ネガティブ」よりも「ポジティブ」 ($p < .01$)、「恥ずかしさ」よりも「ポジティブ」を高く評価していた ($p < .01$) (Fig. 4)。



考 察

1. 自己観察と情動表出の関連性

自己観察時に表出された情動の内訳をみると、「照れ」を最も強く表出しており、次に「ポジティブ」感情を表出している。言語報告を見ると「ポジティブ」を最も強く、次に「恥ずかしさ」を感じていると報告している。ここから、自分自身がリアルタイムで映像としてモニターに映し出される状況において、主観的な情動としては「面白さ」「嬉しさ」といったポジティブ感情を最も多く感じており、さらに「照れ」などの社会的（自己意識的）情動も生起していることから、自分が登

場する映像を見るという経験は「嬉しさ、恥ずかしさ」が混ざった情動を体験しているといえる。

次に自己映像と他者映像の情動表出における比較をみると、自己映像観察場面では「照れ」、「シャイネス」ともに多く表出されており、他者映像観察場面では「ポジティブ」の表出が最も強く、「照れ」は少なかった。言語報告においても同様の傾向がみられ、他者映像に対して「照れ」を感じることは少なく、「ポジティブ」感情を強く感じたことが報告されている。これらの結果から、「照れ」「恥ずかしさ」は自己意識が高揚した時に多く生じていることが確認され、これらの情動は自己意識と密接に関連しているという従来の研究と一致する。自己観察と「照れ」「恥ずかしさ」などの社会的（自己意識的）情動は関連していることが証明されたといえよう。

2. 情動表出に対して社会的文脈が与える影響

各条件における情動表出量に関する結果では、社会的刺激が強い関与条件において情動表出量が最も多かった。誰もいない状況（個別条件）での自己観察と、他者はいるが働きかけがない状況（社会条件）での自己観察では全体の表出量としてはあまり差がない。ところが、他者から働きかけられるという社会的刺激が強い場面になると表出量の増加がみられる。これらの結果から、外部からの刺激によって情動の表出は増えるといえる。すなわち、関与条件はモニターを見ている二者の注意の中心が自分自身であるという情動が賦活されやすい状況であり、さらに他者から働きかけられて、それに反応するという他者との相互作用によって情動表出がますます大きくなったものと考えられる。社会条件と個別条件について考えると、個別条件は他者がいない状況であり、一方、社会条件においては他者がいるものの何も働きかけてこない状況におかれている。これらの条件下では、内的に情動が生起していても情動を表出するきっかけがないために結果として表出が抑制された可能性が考えられる。しかし、他者との相互作用がある他者条件と他者との相互作用がない、あるいは少ないこれら2条件（個別条件、社会条件）との表出量は差がないことから、これらの2条件において情動が抑制されたというよりはむしろ関与場面においての情動がより賦活されて大きく表出された結果、同じ自己映像視聴という状況にあっても表出量に差が出たと考えることが出来る。他方、他者の関与がない自己意識的場面（個別・社会）において「Shyness」が多く表出された要因としては、他者がいない状態あるいは他者が無反応である状況において、自分がどのように振舞えばよいかという役割を見出せなかったことによって生じた決まり悪さと捉えられる。

表出された情動の種類をみると、「照れ」は関与条件に最も多く表出され、“他者が隣にいる”が“何もしない”という社会的状況と比べると、直接的な社会的刺激が多いほうが「照れ」が表出されやすい。個別場面と比較すると、社会条件において「照れ」の表出が多く見られていることから、「照れ」は自己意識的情動であると同時に社会的情動であるといえ、Barrette (1995) の見解を裏付ける結果であるといえよう。

以上の結果から、「照れ」は自己が焦点化されたことによって生じる情動であるが、その表出は社会的文脈においてさらに強まり、社会的な刺激が強いほど表出が強まるという性質を有しているといえる。

3. 情動表出における男女間の比較

情動表出の男女間の比較において、全体の表出量として差はみられなかったが、条件における表出には差がみられた。両群において、社会的な刺激が増加するに従って、情動表出が強くなるという傾向はみられたが、男女間に有意な交互作用がみられた。すなわち、女子のほうがその傾向が顕著に現われ、情動表出に社会的刺激の影響を受けやすい傾向が強かった。表出された情動の種類を比較すると、社会的情動である「照れ」は男子よりも女子に多くみられた。ここに、女子と男子の情動表出の質的な違いがみられる。先行研究において、男子よりも女子のほうが情動表出程度が高い(橘, 1999)という結果がみられている。この研究は実際の表出を取り扱ったものではなく、ある社会的状況を想定した時にどのような情動を表出するかという自己情動についての理解を聞いている。ここでは、対人的状況における情動の使い分け方に関する男女差を捉えていると考えることが出来る。この先行研究の結果と、女子のほうが社会的情動の表出量が多く、さらに情動表出において社会的刺激の影響を受けやすいという本研究の結果を合わせて考察すると、男子と比較して女子の方が情動を社会的関係を繋ぐ役割として機能させる傾向が強いことが考えられる。言い換えると、女子は意識的にせよ無意識的にせよ、対人的な文脈において情動を使い分けしているといえる。一般的に男子と比較して、女子の方がコミュニケーション能力が高いといわれており、それを裏付ける結果であるといえよう。

4. まとめと今後の課題

本研究の結果から、児童において自己観察による自己意識場面と社会的情動(照れ)の表出は密接に関連していること、そして、社会的な文脈が強いほど情動は強く表出される傾向があるということが示唆された。さらに、男子と比較すると女子の方が社会的刺激の影響を受けやすく、情動を社会的に機能させる能力が高いことが推察された。

本研究において設定した社会的場面は大人との二者場面であったが、社会的情動の表出は場面を共にする相手との関係性に大きく左右されるといえよう。今後、関係性を視野に入れた研究を行うが課題といえよう。また、今回取り扱った社会的情動は「照れ」のみであり、「罪悪感」「恥」「誇り」なども含めた、包括的な視点からの情動研究を進めていくことが課題としてあげられよう。さらに、本研究は小学校高学年の児童のみを対象としたが、早期からの発達の視点を取り入れた研究が必要であるといえよう。

謝 辞

本研究作成にあたり、御指導いただきました九州大学大学院人間環境学府 教授 針塚進先生に深く感謝いたします。御協力いただきました対象児の皆様、そして、対象児の協力を得るにあたりお力添えを頂きました、F市立K小学校教諭 梅村宏美さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- Barrett, K. C. 1995 A functionalist approach to shame and guilt. In J. P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotion: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. Pp25-63
- Campos, J. J., Campos, R. G., & Barrett, K. C 1989 Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, 25, 394-402
- Lewis, M. 1993 *Handbook of Emotions* The Guilford Press : New York
- 板倉昭二 1999 自己の起源. 金子書房.
- 久崎孝浩 2003 恥および罪悪感の発達メカニズムに関する理論的検討, *心理学評論*, 46, 163-183
- 久崎孝浩 2004 生後2年目後半における自他分化と社会的情動の関連性についての検討 九州大学心理学研究, 5, 53-63
- 埴 朋子 1999 関係性に応じた情動表出—児童期における発達的变化—*教育心理学研究* 47(3), 273-282
- 佐久間路子・遠藤利彦・無藤隆 2000 幼児期・児童期における自己理解の発達：内容的側面と評価的側面に着目して